
スカラティア剣法帖

鳥一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

スカラティア剣法帖

【Nコード】

N0277P

【作者名】

鳥一

【あらすじ】

スカラティア王国の貴族、じじむさいしゃべり方の青年オーギュストはこの度晴れてスカラティア法学園に入学することと相成った。入学の日の朝、父に呼びつけられてある任務を任される。祖父から学んだ剣と魔法で任務は達成できるのか。

入学前（前書き）

ファンタジー学園者が書きたかった、後悔はするかも知れない……
拙い作品ですがお読みいただければありがたいです

入学前

足音が邸内に響く、まだ声変わり前の少し高い声を上げながら金髪の少年がある部屋の前で立ち止まる。

「兄上！兄上！父上がお呼びです！！」

部屋の中から眠たげな男の声が聞こえる。今の声で起こされたく、やや不満げだ。

「なんだギョンター、朝っぱらから喧しい、もうちいと寝かせて置いてくれても良かろうに」

ボタンとドアを開けて、ギョンターと呼ばれた少年が部屋の中に入る。

「兄上、そのじじむさい話し方は何とかならないんですか？18だつて言うのに、また父上に怒られますよ」

腰に手を当てて少年は呆れたように言う。

「仕方なからうよ、あの祖父様に長い事預けられ取ったのだ、で、親父殿はなんと？」

「さあ？とにかくこんな日の朝にお呼びなのだから、これからの生活に向けての心構えとかではないのですか？」

やや怪訝な顔で首を捻る兄である。

「ふうむ、親父殿がな……」

よっこいしょと言う声と共に起き上がった男は、少年とは対照的に黒い髪にがっしりとした体つきで、やや垂れ気の間目をしている。のろのろとした動作で平服に着替える。

「とにかく、僕は伝えましたからね」

「おう、ご苦労」

男がそう言うと、少年はやれやれというように首を振り部屋を出て行った。

オーギュストは着替えを終えて、頭を擦りながら父の書斎へと向かう、さてはて一体何の話なのやらと首をかしげながら書斎をノックした。

「父上、オーギュスト参りました」

すると部屋の中から重厚な声で返事が返ってきた。

「うむ、来たか、入れ」

木材を軋ませ音を立てながら、ドアを開ける。中にはいると、机の上に山と置かれた書類を読んでいる父親の姿が目に入った。全く朝からご苦労な事だため息をつく。朝っぱらからよくやる。

「全く朝飯を食う前から呼び出しとは……私が朝弱いのはご存知でしょうに」

「ふむ、生憎だが儂もお前の事だけ考えているわけではないのでな、まあ座れ」

父は眼鏡を外し、椅子を此方に向けて勧めた。

「はあ……」

気の抜けた返事をしてオーギュストは椅子に座る。

「いよいよ今日からだな」

「ええ」

今日はオーギュストの入学の日である。

貴族と、有能な平民を受け入れる、王立スカラティア法学園は、剣法、魔法、一般教養を若者に教えるために作られた学園である。貴族たる者、文武に優れねばならないと初代の王が創立した。

全寮制で、その中で自立した生活を行い、学園内で人脈を作れば、卒業後の仕官や、商売、縁談にも繋がる。

ちなみにオーギュストは一応貴族枠での入学が決まっている口だ。それでもある程度の学力や武技、魔術は要求されるが。

こと剣技に於いてはオーギュストは殆ど後れを取った事はない。

一つ咳払いをしたクロードが口を開く。

「お前は知知らぬだろうがな、今年の入学生の中にはちと特別な方がおつてな」

「特別な方……ね」

そう言つてオーギュストは片目を閉じる、考え事をする時の彼の癖だ、人を小馬鹿にしているようだから直せと言われているが、中々改まらない。

「うむ、実は昨日陛下に直々に呼び出されてな……」

オーギュストの父親、クロードは中央黒梟騎士団の団長である。この黒梟騎士団の役割は通常の戦闘の他にもう一つの役割を持っている。それは言わば目付とも言うべき仕事であり、王国内の貴族、

騎士達の不正、反逆を未然に防ぐ為、そして外国への諜報の為に作られた組織である。役目柄敵も多いが、王からの信任が厚くなければ出来ない仕事であった。

またその仕事の性質上、派手な魔法よりも、剣技や武術に重きを置く風がある。魔法は効力を付与するエンチャントと区分される者を学ぶ事が多い。父も、祖父も国に知られた剣豪であった。現在は祖父は既に鬼籍には入り、父も騎士団長となつてからは本人が剣を振るうことは滅多になくなっていくようであるが。

「で、何だというのです」

「陛下の末のお子にマリー様という御方がおつてな」

「ああ、そう言えば、同じ年ぐらいでしたか」

「うむ、然様だ」

「しかし…お姫様が何故わざわざご入学を…？」

王家における女子は基本的には政争の道具である。最終的には近隣の国の有力貴族や王家、もしくは国内の有力者に嫁ぐため、王宮内で教育の一切を終えてしまう事が多い。しかも18才となれば結婚にはちょうど良い年齢だ。

「それが姫様たってのご希望と言う事でな、しかも身分は偽つてこの事だ、一地方貴族として入学したいと遊ばされてな」

「はあ…」

「まあ色々議論はあったのだが陛下が言うにはどうしても叶えてやりたいとの事で、とは言え野放図に入学させるわけにも行かぬ、何せ大事なお体なのだからな、警護は必要であろう」

父の言葉を聞いて閉じていた片目を開ける。少し嫌そうな顔で肩をすくめながら口を開く。

「警護って…嫌な予感がしてきたのですが…」

「察しが良くて助かる」

クロードは口元だけでにやりと笑い、眼鏡を外した。

「つまり、私が姫様の警護をしろと？」

「そういうことだ、陛下が仰るには、というか姫様のご希望なのだ
そうだが、

何人も兵をつけては普通の学園生活も侘なるまいとの事だな」

「太子殿下の時はその様な事はなかったのでは」

現在王家には三人の王位継承候補者がいる。長男、次男、そして
マリーだ。もう一人マリーに姉がいるが既に国内の有力貴族の元に
嫁いでいる。

「うむ、やはり老境に入られてからのお子であられる故に、非常に
可愛がっておられるのだ、まあ目に入れても痛くないといった風で
な」

「やれやれ…拒否権はないのでしょうか…俺の三年間…」

がつくりと肩を落としてため息を吐く。何せ王妃の警護である。
もし過失でもあれば謝って済む問題ではない。それ相応に覚悟を持
って望まねばならない。そんな重大事を頼まれる、と言うことはそ
れだけ信用されていると言うことなのだろうが。

オーギュストはかつて剣聖と呼ばれた祖父の元に14から17迄
の三年間預けられた。

祖父は騎士団を引退した後、父の制止を振り切って王都の下町の
片隅で独りで隠居生活をしていた。オーギュストはその祖父の所で

様々なことを学ばされた、剣から町での遊び方まで色々である。特に剣については7才の頃から学んで来たのでいささかの自負をもっていたが、祖父の技量は常識の枠を超えていた。そして時にはヤクザ者達の用心棒まがいのことまでやらされた。祖父が言うにはその町の生活こそが大多数の人間の生活であり、貴族達の生活のほうが異端なのだと教えられた。だからこそ、貴族であるならば、それを知らねばならないと。そんなことをしている貴族は滅多にいなかったが。

「まあそう言うな、中々外に出られぬ方だから余りその姿を知るものは少ないのだが、お美しい方である故に悪い虫をつけるわけにも行かぬ、それに、経費も出してやれるしの」

経費と言われた途端落としていた頭をがばと上げ、にんまりと笑みを浮かべた。

「真ですか!？」

「現金なやつだの、お前は」

「いやはや、給金が出るとなれば、話は別にござりますよ」

いひひ、と笑って揉み手をする。その様は全く持って貴族らしくない。

「馬鹿者、そんな気分でやられては困る」

「分かっておりますよ、しかしお役目は私だけなのですか」

「然様な事はない……が、密院から人間を出すらしい、しかし誰なのかは知らされておらぬ」

オーギュストは再び片目を閉じ、腕を組む。密院と言えば今一正体のわからない組織である。父は知っているのだろうが、余り口に出

して良い組織でもないらしい。確かヴェパールという侯爵がその首領であつたはずだ。

「こんな時にまで駆け引きですか、事によると……」

「うむ、我らの足下を掬おうという魂胆もあるやもしれぬ」

「ふうむ、全く貴族は誇りだ何だとか大層なことを言う割には汚い話ですな」

「馬鹿者、その言いぐさは何だ、お前とて卒業すれば入隊して貰うのだぞ」

「や、こりゃ失礼、しかし……どの程度お守りすりやいいのですかな、私も男ですからな、まさか風呂や廁まで一緒というわけにも行きますまい」

「まあその辺は一応女官が一人付くという事らしい、しかし授業中までは入りこめんからな、教室内に生徒以外の者がいては教師もやりづらかうて、それに然様な事をすればすぐにばれてしまう」

顎に手を当て、一つ頷く。

「つまり私は寮の中は良いとして、学園の中での警備担当というわけですな」

「いかにも、よいか、けっして姫様に警護と悟られるなよ」

「はい？それはどういう……」

妙なことを言われた、警護をするのは構わないが、ばれてはならないと言われると一気に難易度が上がった気がする。

「ふむ、実は最初は陛下は警護の兵をつけようとしたらしいのだが……姫様がそれでむくれてしまったそうだな、他の生徒と違う扱いは嫌だと……友達ができんと仰られたそうだな」

「また面倒な話ですなあ、身分を隠している姫様を警護だとばれぬ

ようにお守りするのですか」

「だから面倒だとか陛下に対してそう言う言いぐさをだな…いやもう言っても

無駄か、むしろそういった物言いの方が姫様は喜ぶかも知れぬしな」

そう言うときクロードは頭を下げた。

「まあ色々と言ったが警護とともに、姫様の良いお友だちになって差し上げてくれ、お前は剣以外は今一頼りないところがあるが、マリー様は世間を良く存ぜぬ、なにかの折にはお助け差し上げてくれ」
「分かりましたよ…まったく、父上に頭をさげられたら断れないではないですか」

「とにかく、お前自身の生活もしつかりとな、家を出るのが初めてではないとは言え、周囲の者とも上手くやるのだぞ、ああそうそう姫様はマリー・スカラティアではなくマリー・アーヴル・ド・フェリオと名乗っておるからの、急場での書類作成は大変だったわ、儂もちゃんと苦労しているのだ」

「分かりました」

「それともう一つ…」

勘弁してくれと言うように肩を落としてオーギュストが恨めしそうに父に目を向ける。気づいているのかいないのか、父はその視線を見事に受け流している。

「まだあるのですか」

「いや、これは儂の杞憂なのかもしれんが、太子殿下がご入学遊ばされた際に、殿下を誘拐しようとした輩どもがおってな」

「そりゃ、初耳ですな」

「犯人は捉えたのだが…首謀者と思しき者がちと表に出せぬ輩であったでな、実行犯は捕らえたが、最後まではたどり着けなんだの

よ。以前そう言った事例があったと言う事だけ心にとどめ置け」

かなり気になる話だが、ここで父が自ら語らないと言うことは、本当に話せないか話す必要がないかのどちらかなのだろう。

「了解いたした、しかし、息子の晴れの入学の日に仕事の話だけは父上も情の薄い事で」

「やかましい、然様な事を言われたいわけでもない癖に」

「はっはっは、是はしたり、子どもはいつだって親に認められたい者ですぞ」

「ふん：しっかりやるのだぞ」

「分かっております」

「良いか、お前に言っておく、もし、何かが起こり真剣にて立ち会うようなことがあれば…」

クロードは途中で言葉を切り、目をつぶった。

「躊躇うな、相対した者のために死んでもいい、そう思わぬ限りはな、そして今日よりお前はマリー様の為以外に死してはならぬ」

オーギュストは父の真剣な顔を見つめ、無言で頭をたれた。

出発の準備も済み、家を出る時間と相成った。学校は周囲から入り込みづらいよう湖の大きな島にあるため、馬車で途中まで向い、その後船に乗って行くこととなる。

オーギュストの荷物はそう多くはない、教書などは学校支給であるし、何かあれば学校の購買で購入することもできる。持ち物といえは着替えと彼の愛剣ニューアージュくらいだ。隕鉄を使い作られたこの剣を、祖父から受け継いだ。刀身は何故か赤く、やや長めの片刃長剣である。

門前で父と弟、そし老執事のカスパールが見送りをしようと立っている。他の屋敷の者たちや、騎士団には気恥ずかしいので遠慮してもらった。

馬車に乗り込もうとしてオーギュストは何かに気付いたように父に耳打ちをする。

「そういえば……私姫様のお顔を存じないのですが……」

「あ、すまん姫様は銀でできた月の首飾りを身に着けておる、プラチナブロンドの髪を探せ、船着場で会えるはずだ」

こそこそと話をしている二人を見て弟のギュンターが怪訝な声をして聞く。

「何をお話なのですか？」

ギュンターに向かってオーギュストはにやりと笑って言う。

「いやなに、ちくと綺麗所のいる店の話をな」

呆れた顔をしながらもクロードが話を合わせる

「うむ、羽目ははずさぬように」

「出立の間際に何の話をしているのですか！父上まで！！」

むくれたギュンターの頭にぽんと手を置いてにやりと笑う。

「なに、お前にもそのうちわかる、それではオーギュスト・アレオン・ド・ゼルフィオール行つて参る！」

ひらりと身を翻し、馬車に乗り込む兄にギュンターが不満そうに

大声を上げた。

「私が入学したときに恥をかかないように御願いますよ!!」

「おう! 気をつける、もしそうやってしまったら許せ!」

走り出した馬車の中から父親に目を向け一つ頷くと、父もオーギュストを見て一つ頷いた。

「まったく! 兄上は!」

ぷりぷりと怒ったようにギュンターが言い。

「ああならないように、私は勉強に戻ります!」

父親に頭を下げ、そう言って肩を怒らせながら館の中へと戻っていった。

走り去る馬車を見つめながらクロードは独り言のように呟いた。

「父上、お守り下さいますよう……」

隣に立つ細い、鶴のような老執事もまた馬車を見つめたまま「心配ございますまい」と一言返した。

ジェレル湖 船着き場にて

オーギュストが船着場に着くと数十人の新入生であろう貴族の子弟たちが既に集まっていた。

なにやら親についてきてもらっているものもいれば、興味深そうに周りをきょろきょろ見渡している者、不安そうな顔でうろつきまわる者と様々だ。

「さて、プラチナブロンドに三日月のネックレスであつたか…」

あちらこちらを見渡していると何やら叫び声が聞こえた、女性の声だ。

「何だ…」

騒ぎがあれば人もそちらに集まるであろうと考え、声の聞こえた方に向かう。単純な野次馬根性もあるが。すると、二人の男が女性を取り合っているようだった。片方は金髪で背が高い、もう一人は赤毛の中肉中背と言ったところか。

「私が先に声を掛けたのだぞ！」

「ふん、そんなこと関係あるか！」

男子生徒二人が険悪な表情でにらみ合っている。

件の女性は今一何が起きているのか分からない様子でぼかんとしている。なるほど、確かに可愛らしい女性だ。プラチナブロンドの髪の毛が美しい。

「ってあの髪色は…」

良く目を凝らしてその女性の胸元辺りを見てみると銀色の首飾りが見えた。そして胸の谷間も見えた。大きい。

「ふむ、眼福：じゃない、早速面倒事に巻き込まれとるぞ、親父殿」

あの女性が件のお姫様、マリー・スカラティアであることは間違いないさそうだった。キラキラと陽光を反射する髪は元より、大きな瞳は宝石のように緑色に輝いている。形の良い鼻をもち、少しだけ厚めの唇は薄い桜色が鮮やかだ。そして何よりも服の上からでもわかる大きな胸に嫌でも目が惹きつけられる。十人男がいたら十人とも振り返りそうな容姿であった。

やれやれというように頭を掻き、いきなりこれでは先々が思いやられるな、などと考えながらオーギュストはつかつかと喧嘩をしている二人に歩み寄った。余り目立つ事はしたくなかったが仕方がない。万が一マリーに何かあったらどんなことになるか。

お互いつかみかかりそうな剣幕で言い合いをしている二人に声を掛ける。

「ふむ、その二人、晴れの入学式に喧嘩などして怪我でもしたらつまらんぞ」

その言葉に喧嘩していた二人が此方を振り向く、目が血走っている。

「なんだお前は」

「そうだ、関係ないだろう！」

「まあ関係ないと言えばそうなのだが」

そう言ってオーギュストが自分の胸元に付いた家紋を指さす。柊の葉に梟の紋章。判る者ならば、この紋章で気がつくはずだ。

「なんだっていうんだ？」

と、二人の内片方が顔色を変え、少し震えた声で呟くように言う。

「その紋章…まさか黒梟騎士団の…」

ニィ、とオーギュストが笑みをうかべる。黒梟騎士団の存在自体は有名である。何せ実務も勿論大事ではあるが、氾濫の抑止力としても役割を果たさねばならない。

「そうだ、と言っても只父親が団長と言うだけで、俺は正式な騎士団員ではないがな」

腕を組んで二人を見据える。ここで去ってくればありがたいのだが。

「はっ！何かと思えばゴミ処理屋か！」

黒梟騎士団はその仕事の性質上、一部の貴族の中では蔑視もされている。貴族にあるまじき行為だ等という者達もいるようだ。そしてこの男はどうもそちら側だったらしい。

「ふむ、退いてくれんか」

「そんな必要があるのか？」

「では仕方ない、どうすれば退いてくれるのかね」

「退く必要がないと言っている」

そう言うとき金髪の長身の方が歩み寄ってきてオーギュストの胸ぐらを掴んだ。

「わかったらとつと失せるんだな」

凄みを効かせて脅しをかけてくる。さて、どうするかと考えていると件の女生徒、マリーが声を掛けてきた。

「あの、暴力はいけませんよ？」

言われた金髪がへらへらと笑いながら答える。

「そうかい、じゃあ後で俺に付き合ってくれたら止めてやるさ」

「ああ、はい、お茶何かですか？でも先ほどの方はよろしいのかしら。先に

声を掛けてくださったのはあの赤毛の方でしたし：そうですね！」

良いことを思いついたとしても言うようにとマリーがポンと手を叩く。

「そちらの方も合わせて四人で言うのは如何でしょう、お友だちは多い方がきっと楽しいと思いますの」

金髪の男は眉間に皺を寄せて首を振る。

「いやだね、俺はアンタと二人で話しがしたいんだ、話以外もな、こいつを話してほしけりゃ、うんといいなよ」

そう言われてマリーはふうと一息ため息をつき、頷いた。

「わかりましたわ、人数が少ないのは残念ですけど、行きますからその手をお離しになって」

「ふん、わかりやいいさ…」

「いいや、行くことはないぞ」

黙ってやり取りを聞いていたオーギュストが自分の胸ぐらを掴んでいる金髪の手を掴み、その手を振り払う、流れるように体を動かして相手の背後に回り込み、腕の関節を取った。力はいれていないので周りからはただ相手の背後に立っているようにしか見えないが、これで相手は手出しできない。周りからは何故体の位置が入れ替わったのかわからない者も多いようで。小さなどよめきが起きている。

「さて、これで俺が力を入れればポッキリといくやもしれんな、しかしこのめでたい日に他人が怪我をする様は見とうない、ここは俺に免じて退いてくれんかね」

「くそ！離せ！」

相手の耳元に口を持って行き周りに聞こえない程度でそっと呟く。その声は冷たく暗くゾツとするような声で。

「これ以上恥の上塗りをすれば、お前の父親がどう言われるかを考えよ、梟の目を余り舐めるな」

「う……わ、わかった……」

オーギュストが腕を放すと相手は此方を恨めしげに見ながらすごすごと退散していった。もう一人マリーに声を掛けていた方はすでにいなくなっていた。

やれやれと言うふうには首を振るオーギュスト、するとマリーに声を掛けられた。目立ってしまったが仕方がない。

「残念ですわね、早速お友だちができるかと思いましたのに」

「はあ、そう言う感想ですか……っと、そう言う感想か」

つい敬語になってしまった言葉を慌てて修正する。その事については特に不審に思われなかったようだ。それよりも何かおかしな事を言っただろうかとキョトンとした顔になるマリーである。

「でも仕方ありませんわね、そうしたら貴方が私のお相手をしてくださるのかしら？」

微笑みながらこちらを振り向いたその笑顔は大層美しかった。この誘いを受けて断れる男はいるまい。

「ふむ、そう言うことになるかな」

「ああ、嬉しい、何だかワクワクしてきました、こんな風に知らないの方とお話しする機会なんて滅多にありませんもの！」

はしゃぐマリーの姿を見てオーギュストはぽりぽりと頬を掻きながら言った。

「あー、先ず自己紹介というものをした方が良いのではないか」

そう言われるとマリーはにこりと笑い、名乗った。

「ああ、そうでしたわね、失礼いたしました、うれしくてつい、私はマリー・アーヴル・ド・フェリオ、遠くから来た田舎者なので色々とお教え下さいましね」

成る程、フェリオ領と言えば確か西の果てだ、そんな地方のことを知っている者など中央には余程の物好きでない限りそうはいない。自分も良くは知らないが、余り情報を持ちすぎればボロが出るとのこと、マリーの設定については詳しくは知らされていなかった。

多分フェリオ領は老貴族が一人で治めてでもいるのだろう。

「む、俺はオーギュスト・アレオン・ド・ゼルフィオール、よろしくな」

「あら、アレオン……様の所の」

「父をしつとるのか」

「ええと……黒梟騎士団は有名ですから……その……」

「そ、そうだな、うちの父は有名だな」

全く持って知らないふりをするというのは疲れる。

思わず吐きそうになるため息を飲み込み、そこでオーギュストは自分たちが妙に注目を集めてしまっていることを思い出した。いかん、目立ちすぎだ。余り目立つとどこからぼろが出るかわからないと考えていると、誰かがこちらに駆けてくるのが見えた。

「マリー様……！」

メイド服を着た背の低い少女が駆けてくる。くりくりとした目は鳶色だ。ポニーテールにまとめた髪は濃いブラウンである。顔はまだ少女の面影を残しているようだ。

「あら、エリザ、ここよここ」

駆けてくる少女にマリーが手を振る。

「マリー様！大丈夫ですか！？何やら男にちょっかいを出されていると聞いて……むむ！」

エリザと呼ばれた少女がこちらに敵意を持った目を向けてくる。

「貴方、貴族のようですがマリイ様に一体何のようですか!？」

「いや……俺は」

「お茶に誘われただけよ、でもね、何故だか声を掛けて下さった方達が喧嘩を始めてしまって、こちらの方がその仲裁をして下さったの、本当はみんなでお話しできれば良かったのだけれど」

エリザと呼ばれた少女が怪訝そうにこちらを見る。敵意はまだ消えていない、多分。なんだか機嫌の悪い犬のようだ。

「そうですか、それはありがとうございました、マリイ様のお茶のお相手は私がしますのでこれで!」

会話を切るように強い語調でそう言ってマリイの手を引いて行く。うとするエリザにマリイが声を掛ける。

「エリザ、め!」

「うい!？」

「私、こちらの方……オーギュスト様とお話したいの、それに少しご無礼よ、名前も名乗らないなんて」

言われたエリザは少し不満そうに頬を膨らます。自分も名乗らなかったけどな、と言う言葉は敢えて飲み込んだ。

「うう……でもですね……」

オーギュストは考える。この娘が例の女官という者なのだろう。女官と言うよりは使用人と言った風情だが、警護を協力してやる以上味方につけておかねばならない。そんなことを考えていると、視界に大きな船が入ってきた。この船に乗って学園まで行くのだ。

「お、船が来たようだ、続きは中でということにしようか、西の果てから来たのであればあの船は珍しかろう、少し近くで見てください
良い」

「ええ、そうしますわ」

嬉しそうな顔で棧橋の方にマリーが駆けていく。

「あ、私も！」

「まで、ちびっ子」

そう言って駆け出そうとしたエリザの後襟をオーギュストが掴む。

「ぐえ！な、なにするんですか！？それにちびっ子って！」

こちらを睨むエリザにオーギュストは小声で話しかける。

「ちと黙れ、姫様は俺が視界にとどめておく故」

「姫様って…あ！もしかして貴方が！！デファンス様！？」

「馬鹿たれ、聞こえたらどうする」

いけない、と言うように口元を抑えたエリザがそーっと棧橋の方を見る。マリーは船に夢中になっているようだった。

「そうだ、オーギュスト・アレオン・ド・ゼルフィオールだ、陛下の命にて姫様をお守りすることに相成った」

「あ、そうとは知らず先ほどは失礼を…私、エリザと申します」

「良い、それよりもお前気負いすぎだ、もう少し肩の力を抜け、姫様を守ろうと意気込んでいるのはわかるが、もうちと自然にせんとバレルぞ」

「すいません、姫様に何かあったらと思うと気が気ではなくて」

「うむ、とにかくお前一人で守らねばならんわけではないのだ、少しは安心しろ……しかし先ほどは何をしていたのだ？」

「あ、ちよとお手洗いに行ってまして……」

もじもじと顔を赤らめて俯いたエリザを見て頭を抱えそうになってしまった。何故この娘なのだろうか。と、視線の中のマリイがこちらに手を振っているのが見えた。どうやらエリザを呼んでいるようだ。

「ほれ、マリイ様がよんどるぞ、行つてこい」

「あ、は、はい」

マリイに向かって駆けていくエリザはまるで子犬のようだ。マリイよりも夢中になって船を見ている。微笑ましい光景ではあるが、前途は多難だろうな、とオーギュストは思った。

新人生達が乗り込んだ船はネブカドル号と呼ばれており、学園への物資や、大人数の移送を行うために造られた船である。その巨体の特徴的であるが特筆すべきはその大きな船体ではない。

「しかし壮観だの」

「ね、ね、すごいですね、こんな大きい船が水にが浮くんですね」

甲板の先端で手すりに身を乗り出し、嬉しそうにはしゃぐマリイ。その横ではエリザがおっかなびっくりと言った様子で水面を見ては顔を隠し、見ては隠しと言うことを繰り返している。どうやら水が怖いらしい。

「こんなに大きいのに沈まない……うう、本当に沈まないんだろうか……」

船の舳先の方にエリザが歩いていく、怖い怖いながらもっと良く見てみたいという気持ちもあるらしい。オーギュストもまた舳先の方へと歩いていく。すると湖面が山のように盛り上がり始めるのが見えた。

「なに……?」

辺りの空気を振るわせるように大きな声を上げながら水面から顔を出したのは巨大な竜である。水竜と区分されるものの中でも大型のものだ。大きな青い体に陽光を反射させながら、船の前をゆったりと泳いでいる。

「ほう、これは見事な」

「大きいわねえ」

「な、な、な……なにこれ!？」

三者三様の反応を見せる彼らの周りでも他の生徒達がざわついている。水竜は毎度のことなのかそんな甲板の様子を気にすることもなく、すいすいと泳ぎ続けている。この船の最大の特徴は、帆に風を受けて走るのではなく、竜に引かせて走るということにある。

周囲の注目が竜に集まっている中、オーギュストは何か違和感を覚える。この世界で竜は珍しい生き物である、普通であれば、恐れるか興味を抱くかの差はあれど、注目してしかるべきだろう。

しかしそれを特に気にした様子もなくこちらを見て据えている者がいる。フードを被り、顔は良く見えない。そしてこちらに気づかれる様にこちらを見据えるとは尾行にしては下手すぎる。故に、不気味だ。

何者か誰何しようと一步踏み出すと、そのフードは船内へと入っていった。

「ふむ……」

ちらと、まだ竜に夢中になっている二人を見る。この甲板の上ならば人目も多い、先ほどのフードがマリーを狙い、自分をおびき寄せる罠を這っていたとしても、二人が狙われることはないだろう。ならば。

「乗ってやるかな」

オーギュストもまた船内へと入っていった。剣の鯉口を切って。中にはいると広い部屋の左右に多くの扉が並んでいる。その奥に階段がある、黒いフードが階段を下りていくのが見えた。追って階段を下りていくと船倉にたどり着いた。これ見よがしに戸が開いている。オーギュストは気にする風でもなくそのまま船倉の中に入ってしまった。

薄暗い部屋の中に人の気配はない。しかし、誰もいないと言うことは考え辛い。身を隠しているのか、だとすれば。

そこまで考えたオーギュストの背後の扉が閉まる、音に対して振り返ると、扉の影から銀色の刃が突き出されてきた。刃を持っているのはあの黒いフードだ。

「ほう！」

横っ飛びに転がり刃を躲し、体勢を立て直す。

「シィイ！」

気合いと共に、そのまま踏み込んで抜き撃つ、紅い光芒が一閃する。フードを切り裂いた。

はらりとフードが切り裂かれ、ナイフと共に床に落ちる。そしてその中から姿を表したのは……何もなかった。フードが裂かれると其処には何も存在していなかった。幻術ではない、それが証拠にナイフとフードはこの場に残されている。影を操り、己の自由に行動させる魔法。

「影遣か」

呟いて、落ちたナイフを拾い上げる。何の変哲もない短剣だ、特徴と言えば二匹の蛇がからみついた取っ手の紋様。その短剣を懷にしまい足早に甲板へと戻る。今の影を操っていた者が何者であれ、あの衆目の中マリーを襲うとは考えづらいが、万一と言うこともある。

階段を駆け上がり、船内から甲板に出ると、舳先で何やら楽しそうに会話をしている二人が目に入った。ホッと胸をなで下ろす。そして甲板の上にいる人間を見渡す。不自然な様子を見せている者はいない。この中か、船内かに犯人はいるはずだ。

オーギュストは考える、一体先ほどの襲撃は何の意味があったのか。自分の排除？警告？そもそも狙われたのはマリーだったのか？片目を閉じて考えるオーギュストに、マリーが声を掛ける。

「あら、どちらへ行かれていたのです？」

「いやなに、ちと中が見たくなってる」

「あら、でしたら誘って下されば良かったのに」

「いや、まあ、竜に夢中になっておるようであつたでな」

舳先の水流がもう一度大きく啼いた。どうやら到着が近いらしい。さてはて、どうなるものやらと考えていると、マリーが言った。

「楽しくなると良いですわね」
「まったくだの」

答えて、オーギュストは苦笑した。

入学前（後書き）

入学前で投稿してしまった
のんびりと書いていければと思っております
お読みいただきありがとうございます
感想など頂ければ幸いです

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0277p/>

スカラティア剣法帖

2010年11月20日21時17分発行